

氏名	ササキ アスカ 佐々木 あすか
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第308号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉鎌倉時代彫刻史における新形式・新様式の形成過程の研究－奈良 仏師康慶・運慶を中心に－

論文等審査委員

(主査)	東京芸術大学	准教授	(美術学部)	松田 誠一郎
(副査)	〃	教授	(〃)	田口 榮一
(〃)	〃	〃	(〃)	佐藤 道信
(〃)	〃	准教授	(〃)	片山 まび
(〃)	清泉女子大学	教授		山本 勉

(論文内容の要旨)

本論文は、仏師康慶（生没年不詳）とその子の運慶（?-1223）の作例を主に取り上げ、さらに京都仏師の作例を加え、12世紀後半を中心とした彫刻史全体の展開を考察したものである。鎌倉時代の新様式は、康慶の現存最古の作例である治承元年（1177）、瑞林寺地藏菩薩像や、運慶最初期の作である安元2年（1176）、円成寺大日如来像において、すでにその方向性が示されるとされる。また、院政期の伝統的な作風を遵守した京都仏師に対し、12世紀半ば以降の奈良仏師作例における先進性が注目されてきた。しかし1170年代に至る間の新形式、新様式の形成過程は、不明な点も多い。この過程を作品に即して具体的に解明することで、康慶、運慶の特に初期作例の位置づけを明確化し、同時に、師弟関係にある康慶、運慶それぞれの造形上の特質を具体的に明らかにすることを目的とした。本論文では、その手段として主に形式と作風の観点より考察を行う。形式面での整理や作風面での仏師の特徴を抽出する本論文の研究方法は、転換期における様々な作例を体系化し、個別の仏師論あるいは平安時代後期から鎌倉時代の彫刻史の展開を論じるための基礎的な作業として重要と考える。

第1部は細部形式について取り上げ、第1章と第2章では菩薩形像、明王坐像における裾・腰布の着衣形式の、第3章では菩薩形像、神将像の天冠台形式の変遷を通史的に考察した。着衣形式、天冠台形式ともに、定朝以後の作例には堅固な規範性が認められ、これに対し12世紀半ば以降の奈良仏師作例において新形式が現れることを指摘した。また第1章の着衣形式では、12世紀第4四半期には、院政期の典型形式の一部に新しい要素を取り入れた作例が現れ、それが院政期の形式の規範性の減退を示すことを指摘した。第2章では、11世紀初めまでの着衣形式には、定朝以後の堅固な規範性や尊像のカテゴリーで形式を区別する特徴はみられず、定朝を境に形式およびその用い方に画期があることを指摘した。第3章の天冠台形式では、菩薩形像において意匠、形態ともに1220年代に新形式が現れ、運慶次世代の活躍が始まる頃に形式の変化があることを指摘した。

第2部では、康慶、運慶の作例を取り上げ、同じ尊像どうしあるいは同一形式に注目し比較することで、そこに指摘できる相違点から康慶あるいは運慶の造形上の独自性を抽出することを試みた。第4章では、浄瑠璃寺大日如来像を康慶周辺作と位置づけるなかで、康慶作例は定朝様の彫刻面にも通じる保守的な一面を示すのに対し、運慶作例はより急な彫刻面で構成されて、定朝様のそれとは一線を画すことを指摘した。第5章では、円成寺大日如来像の特徴である的確な人体把握、三次元での統一的な立体表現が康慶の瑞林寺像にはみられず、運慶最初期の円成寺像において、すでに康慶とは異なる志向が示

されることを指摘した。第6章では、康慶作、興福寺南円堂法相六祖像と運慶作、興福寺北円堂無著・世親像を取り上げた。康慶作例は肉身よりも表面の衣文や印象的な動勢の表出が優先されるのに対し、運慶作例は統一的な立体表現を第一とすることを指摘した。第7章では、定慶作説、運慶作説の2説がある興福寺南円堂四天王像を考察し、併せて康慶、運慶の神将像を取り上げた。南円堂四天王像は、形式、作風ともに定慶作例に通じ、運慶の特質である統一的な立体表現などは窺えないことを指摘した。

第3部では、康慶、運慶が属する奈良仏師から離れ、同時代の他派仏師の作例を取り上げた。第8章では、12世紀第4四半期以降の新形式受容の展開を具体的に把握するために、着衣や天冠台のほか髻や条帛の形式を加えて総合的に検討を行った。第9章では、円派仏師明円による、安元2～3年(1176～77)造立の大覚寺五大明王像を取り上げた。大覚寺の不動明王像を除く四明王像は、張りのある肉身や背筋を伸ばした姿勢が瑞林寺像、円成寺像と共通することを指摘した。

以上より、院政期の形式と対比し、奈良仏師作例に特徴的な規範性ある形式を明らかにしたことで、細部形式が仏師系統を判別する客観的な基準となりうることを提示した。また、康慶、運慶作例における作風上の最大の違いは、彫刻面と立体表現にあると考えた。そして、瑞林寺像、円成寺像と共通する新しい要素を大覚寺四明王像に指摘したことで、明円を京都仏師のなかでも新しい作風を示す仏師として捉え直した。康慶、運慶、明円では新様式への方向性は各々異なるものの、3者の作例は1170年代における定朝以来の伝統からの脱却を具体的に示す。これまで単純化されがちであった奈良仏師と京都仏師の対照的な捉え方を再考し、仏師系統、仏師それぞれにおいて鎌倉新様式の形成の様相をより重層的、具体的に把握したうえで、この期の彫刻史を捉え直す必要性を提起した。

(博士論文審査結果の要旨)

本論文は、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての仏教彫刻の造形を、形式・様式の両面から複眼的に検討し、鎌倉新様の成立過程について考察したものである。その研究対象は、鎌倉新形式・新様式の形成に大きな役割を果たした康慶・運慶をはじめとする奈良仏師の作品を中心としながら、その影響を受けた仏師の作品や、従来奈良仏師とは対立的に捉えられてきた京都仏師の作品にまで及んでおり、広範な視野からこの時期の仏教彫刻の造形表現の展開や、その作家系統の問題を論じている。

その方法論は、奈良仏師作品の着衣・装身具・甲冑などの細部形式に関する分析的な研究を理論的支柱としている点に大きな特徴がある。客観性の高い緻密な形式論と、熟覧調査の経験に立脚した様式論を車の両輪として、康慶・運慶をはじめとする奈良仏師の作品に関する実証研究を中心に据えながら、緻密な細部形式の分析に基づく仏師系統の識別や、京都仏師・明円の作風に関する斬新な解釈などを展開し、鎌倉彫刻形成期の仏教彫刻に関する諸問題を包括的に論証している。

第1部の形式研究においては、院政期奈良仏師の細部形式を平安時代後期のそれと対照しながら、その特質を歴史的かつ体系的に明らかにしている。また、基準作例の検討を通して、奈良仏師作品にみられる諸形式が細部に至るまで堅固な規範性を有しており、他系統の作家の作品と明瞭に識別し得ることを実証している。さらに、奈良仏師の新形式が、奈良仏師以外の作家によって部分的折衷的に採用されていたことも論証し、鎌倉彫刻における新形式形成の具体相を明らかにしている。その形式論は、多くのメルクマールをコード化して作者系統を識別する方法論を確立した点において、従来の研究水準を飛躍的に向上させたといえる。

第2部の奈良仏師の作品研究においては、浄瑠璃寺大日如来像(第4章)・円成寺大日如来像(第5章)・興福寺南円堂法相六祖像(第6章)の研究を通じて、康慶作品と運慶作品との間にみられる造形表現の相違を問題にし、そこに奈良仏師による新形式・新様式の形成過程の具体相をみるとともに、両者の個性の差に着目し、過渡期的な様相を呈する康慶作品の造形表現に積極的な意義を認め、その特質に言及している。また、本来の安置堂宇や作者に関して議論のある奈良仏師作品、興福寺南円堂四天王像(第

7章)を取り上げ、詳細な形式分析の手法を効果的に用いて、その造形的特質を明らかにし、東金堂安置の定慶作品である蓋然性が高いことを論証している。いずれの論証も詳細かつ緻密で、推論も慎重であり、その結論はおおむね妥当なものと考えられる。

第3部の非奈良仏師の形式・作品研究においては、第8章では定朝形式と奈良仏師形式の「折衷型」を示す作品群をとりあげ、その作家系統を非奈良仏師に帰するとともに、院政期に奈良仏師によって創始された新形式が拡がりを見せる、その実態を明快に例証している。第9章では、京都仏師・明円の基準作である大覚寺五大明王像(安元2年〔1176])を取り上げ、京都仏師の保守的作風の典型とされてきた中尊・不動明王像が実は明円の作品ではなく、残りの四明王像こそが明円の作品であることを論証し、四明王像の作風に、同年に運慶が製作した円成寺大日如来像に通じる斬新な要素が含まれていることを指摘している。この結論は、「革新的な」奈良仏師に対する「保守的な」京都仏師という、これまでの仏師観に再考をせまる新説とであり、今後の研究において、「奈良仏師」概念の外延を形成してきた「京都仏師」概念を見直す重要な契機となるものと予想される。

本論文は、これまでの鎌倉彫刻の成立過程に関する研究水準を大きく引き上げる画期的な業績であり、本論中において示された方法論や新知見は、今後の研究に重要な指針を与えるものと確信される。

総合審査結果の要旨

論文審査会後に実施された最終試験の結果(別紙参照)を考慮し、総合審査について審査委員全員で協議した結果、次の結論に至った。

- a. 本申請論文は、美術史学の発展に大きく寄与する卓越した研究業績であり、博士号を授与するに値するものと認められる。成績は97点、可否は合格とする。
- b. 最終試験結果も良好であり、博士号にふさわしい十分な学識を有していることが証明された。
- c. 総合審査は、論文審査と最終試験の結果を勘案し、成績は97点、可否は合格とする。